

石見銀山と海外とのつながり

石見銀山は、その 400 年の歴史の中で、精力的に国際社会への関与を見せた時期が 2 回ありました。最初は、1527 年の鉱山の発見後すぐから 1600 年代初頭まで続く時期で、2 回目は、明治時代（1868～1912 年）の日本の急速な近代化と軌を一にしています。

大航海時代の銀

スペインとポルトガルの帝国が世界貿易を拡大し、メキシコからマカオまでの土地と人民を植民地化した 1500 年代、銀はおそらく世界で最も需要のある商品となりました。これらの支配的國家の富の源泉、すなわちメキシコのグアナフアト、ボリビアのポトシ、そして石見銀山などの土地で採掘された銀は、世界経済の潤滑油となります。石見の銀は、主にポルトガル人の手で取引され、彼らを中国の絹で銀を購入していました。銀の一部は明朝に売られ、残りはポルトガルの海洋帝国全域で流通することとなります。1500 年代後半に世界中で取引された銀の総量のうち、少なくとも 10% は石見銀山のものであったと推測されます。これを可能としたのが、国際交易のもう 1 つの産物である灰吹（はいふき）法でした。これは銀の精錬方法の一種で、1533 年に朝鮮半島から伝わり、高純度の銀を大量生産が可能となったのです。ところが、徳川家が日本全国をその旗の下に統一し、1603 年に、1867 年まで国を支配することとなる幕府を樹立した後は、石見銀山と世界経済とのつながり大きく断絶します。徳川家は、外国との接触を制限し、鎖国政策を採用して、これが 1800 年代後半まで続きます。

植民地とのつながり

日本は、1868 年の明治維新以降、再び外の世界に目を向け始め、これが明治天皇（1852～1912）を主権者とする新政府の樹立へとつながります。日清戦争（1894～1895）で勝利した結果、台湾を含む中国の領土を獲得した日本は、植民地保有国となります。当時、石見銀山は藤田組によって管理されていました。藤田組は 1886 年に銀山の採掘権を取得し、国内の他の地域でも複数の鉱山を経営していました。ところが、所有する鉱山は採算性が低く、藤田組はひどい経営難に陥ります。1896 年、新しく獲得した植民地の開発に熱心だった日本政府は、台湾の有望な鉱山 2 か所に対する権利の割り当てを行います。藤田組は、このチャンスに飛びつき、台湾島北部の九份近くにある瑞芳の金銅鉱山を与えられました。

石見銀山と台湾

藤田組は、台湾の保有地に巨額の投資を行い、採掘と精錬のために最先端の機器と技術を導入します。その一部は、石見銀山で開発されたものでした。石見銀山で自らの価値を証明した技師その他多くの専門家も瑞芳へと派遣され、2 つの鉱山間で積極的な人事交流が行われました。瑞芳は活気あふれる街へと成長し、1923 年に藤田組が突如として台湾での操業を停止した際の危機的状況も乗り越えます。その年はまた、世界市場における銅価格の下落により、藤田組が石見銀

山の操業停止を余儀なくされた年でもあります。日本人による台湾での鉱山開発は、九份に近い金瓜石の金鉱山で続き、1930 年代に最盛期を迎えます。1935 年の時点で、金瓜石は、同種の施設としては、大日本帝国内で最も生産性の高い施設であり、年間最大 2.6 トンの金を産出していました。操業は 1987 年まで続き、現在は史跡に指定され、博物館では訪れる人々に九份における鉱山開発の歴史を紹介しています。